

7月7日 ヨハネによる福音書5章19～36節

「イエス様への信頼」

私たちは日々「祈り」を行っています。祈ることによって願いが叶うと信じています。しかし祈りとは祈って終わりなどではなく、その願いに即した行いを続けることも求められます。イエス様への信頼と、神様を信じる心によって、祈りを止めることなく行動を続けていくのです。

今日の個所では、神様の正しさを信頼するイエス様の様子が示されています。イエス様は人となった神であります。人々の病をいやし、罪を赦し、死者さえも生き返らせてしまう、神様の力を持っています。しかしそのイエス様が「自分からは何もできない」と語る場面が今日の個所の中心になっています。

イエス様は三位一体の子なる神なのですが、しかしここではイエス様一人だけによって神であるわけではないことが示されています。あくまでも奇跡などの業を行っているのは神様の力であり、そしてイエス様が十字架についた後に復活する、その業も神様によってなし遂げられると強調されています。

そのイエス様には、罪の赦しと罪に対する裁きの権利が神様から与えられていました。ユダヤ人たちがイエス様を殺そうとするために言っていた「神にしかできない罪の赦しを勝手に行うなんて神を冒瀆している」という主張が見当違いのものであり、イエス様がその業を行うにふさわしい方であることがここで示されています。

そのイエス様が、「自分の言葉」で証しを行っていたわけではないことが続いて示されています。もし自分が考えた言葉を使って、それだけによって「正しい」と主張しているのであれば、そこには誤りが生まれることでしょう。そうではなく、旧約聖書の時代に人々に与えられた預言がすでにあり、それが自分のことをすでに証ししていると、イエス様は語っていたのです。

ここで、イエス様が語るように私たちキリスト者もまた、「自分が正しい」という証しをしないように気を付けなければいけません。そして私たちは、イエス様とは違いますから、自分の正しさを証明を神様にしてもらおう事も出来ません。だからこそ私たちは、正しくありたいのであれば、神様を信じて、イエス様を信頼して、その言葉に従う必要があるのです。

私たちに求められているのは、ただ神様を愛し、隣人を愛するということです。そこに、自分たちの正しさは関係ありません。そして姿勢は、私たちが行う祈りにも現れていくのです。

私たちは祈ります。この世界には、自分の力だけではどうにもならないような問題が数多く存在します。その度に私たちは祈り願います。その祈りが「正しい祈り」なのか、私たちは常に問い続ける必要があるのです。自分本位になっていないか、自分や自分の友人、すぐ隣にいる隣人だけが得をして、喜ぶような未来を願っていないか。私たちの隣人は、イエス様の大宣教命令が語られたその時から、共にこの時代に生きる全ての人々にまで広がっています。だからこそ、私たちは神様の御心に従って、すべての隣人のために祈り続けるのです。

そして私たちはただ祈るだけではなく、祈りに従った全ての行動によって、この信仰に生きる人生を続けていくことが出来ます。その祈りが届くという信頼によって、私たちは今日も堂々とこの信仰を続けることが出来るのです。神様への信頼によって支えられながら、今週一週間の、これからの歩みを進めていきましょう。

- 19:そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「よくよく言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何もすることができない。父がなさることは何でも、子もそのとおりにする。父は子を愛して、ご自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたがたは驚くことになる。父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、自分の望む者に命を与える。また、父は誰をも裁かず、裁きをすべて子に委ねておられる。すべての人が、父を敬うように、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。よくよく言うておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁きを受けることがなく、死から命へと移っている。よくよく言うておく。死んだ者が神の子の声を聞き、聞いた者が生きる時が来る。今がその時である。父が、ご自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださったからである。また、父は裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。このことで驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞く。そして、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るであろう。私は自分からは何もできない。聞くままに、裁く。そして私の裁きは正しい。それは、私が自分の意志ではなく、私をお遣わしになった方の御心を求めているからである。」
- 31:「もし、私が自分自身について証しをするなら、私の証しは真実ではない。私について証しする方は別におられる。そして、その方が私について証しする証しは真実であることを、私は知っている。あなたがたはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。私は人間による証しは受けない。しかし、このことを言うのは、あなたがたが救われるためである。ヨハネは燃えて輝く灯であった。あなたがたは、しばらくの間、その光を楽しもうとした。しかし、私には、ヨハネの証しにまさる証しがある。父が私に成し遂げるようにお与えになった業、つまり、私が行っている業そのものが、父が私をお遣わしになったことを証ししている。」